



木村 幸高さん(酒田)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：7月27日

仲間と楽しく話げできた浪江の生活を 懐かしく思い出します



▲スナックエルベ（山形県南陽市）にて
終始優しい表情でお話しを聞かせてくださった木村さん。

木村さんは、山形県南陽市の借上げ住宅に単身で暮らしています。口下手だからと恥ずかしがりながらもお話ししてくださった木村さん。「こっちに来たら来たで、つながりもできて暮らしやすいよ」とにこやかに話されていましたが、これからの生活に不安も抱えているそうです。

普段はふれあいセンターなみに勤務しており、地震のあった11日は16時から仕事でした。地震の後、職場は避難してきた人でいっぱいになりました。近くの幼稚園も借り、水と電気が止まっていたので、トイレや食事の水を用意したり、発電機を用意したり。その後、落ち着いたので22時頃、一旦私は自宅に帰りました。帰ると、同じ住宅に住む皆が集まっているし、まずは安心だと思いき、その日は床に寝たのですが、翌日朝起きたら誰もいなくなっていました。電気も使えなくなっていました。

発事故の情報も知るすべがなく、どこに避難すればよいかわからず、17日に自衛隊が救助にくるまで自宅に過していました。その後、よく行っていた『スナックエルベ』の福原さんが知人を通して連絡をくれ、「自分が避難している山形にまず来てはどうか」と言ってくれ、福原さんの義理の息子さんに迎えに来てもらい、山形県南陽市に避難しました。福原さんの娘さんと以前同じ職場だったことが縁で仲良くしてもらっていました。本当にありがたかった。

浪江では、あんまり出歩かなかったけれど、職場の人と一緒によくパークゴルフや釣りをしていました。こちらに来てからは仲間がいなくてなかなかできていません。前震のあった3月8、9日も請戸でパークゴルフをしておりすごい揺れでしたが、皆逃げようとしなかったですね。11日も4人で行く予定でしたが、仕事で行けなくなり今思うと行っていたら危なかったと思います。

この3年の間には、家に閉じこもり正直誰とも会いたくなくなった時期もありました。賠償について心ない言葉を投げられることもあり、家に閉じこもることもありました。ですが、3・11から3年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

どちらにしろ、生きている間に浪江に帰れないとは思っているのですが、これからどうなるのか心配です。いずれ借上げ住宅の補償が打ち切りになったら、家賃がどれくらいかかるのかわからず、私は一人暮らしで頼るところがなく、住まいへの不安は大きいです。また、毎日楽しく過ごしていた仕事や仲間との時間を奪われてしまったのも大変残念です。浪江にいたら、老後の設計が立てられたと思うことがあります。復興住宅を早く建ててもらいたい、それが今一番の望みです。

浪江のこころ通信

・第39号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から3年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第39号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





鈴木 卓さん(請戸)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木
取材日：7月6日

ほんとはもっとみんなで集まって話したい！

「もう3年になりますね。なんかもう落ち着きすぎた感じです」と、お子さんの成長を見守りながら将来に思いを馳せる一方で、復興には想定も想像もできないくらいの時間がかかっている、物事が進まないことへの苛立ちを感じている様子がかえりました。



▲こうたくん(7歳)、りんかちゃん(4歳)
いわき湯本にて

■横浜でやりがいのある仕事に就く
二次避難で旅館や温泉施設に避難していた山形から横浜に出てきたのが5月。まずは自分一人であって、1か月くらいで住む所を見つけてきました。東京や神奈川に親戚がいて、応援するよと言ってくれたのがきっかけでした。ちょうどそのゴールデンウィーク前に仮設住宅の応募の話があつて、父親から「お前たちはどうする？」って聞かれましたが、自分たちは申込みませんでした。それから両親が仮設住宅に入居したのは夏前だった

と思います。自分たちはもう横浜に来てからの話でしたね。横浜で妻と子どもと一緒に暮らし始めて、その後、仕事が決まったのは9月頃でした。もつと仕事は豊富にあるんじゃないかとイメージしていましたが、実際は決まるまで大変でした。決まってからずっと今の太陽光発電システムを取り扱っている会社で働いています。今回の震災と原発事故があつたことで、クリーンで再生可能なエネルギーに魅力を感じてやってみようと思ひ、始めてみてやりがいも感じています。これからのことを考えて取り付けてくださるお客様も多いです。最近出張で、茨城、山梨、長野、静岡に行きますけど、地方の需要は伸びていると思います。東北にも支店があり、これから忙しくなるという話は聞いています。

■揺れ動く心境
横浜に来てこの生活にも馴染んでいますが、そもそもここで暮らすということまで考えて移動してきてはいないので、3年も経って落ち着いてはきていますが、福島で親は仮設住宅に入っている状況です。

し、自分は長男なので、戻れるならば戻りたい気持ちは当然あります。反面、今3年以上たった状況で、戻れないなら戻れないでもいいって、個人的な考えですけどね。戻れないなら次の新たなステップを踏むために、一から新天地で基盤をつくっていくかなければならない。そういったところへの支援策を考えてほしいですね。



上野 昭平さん(立野)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：8月11日

帰ってみることは出来るけど、住むことはできない

昭平さんは本宮市恵向仮設住宅にお住まいで、隣には長男の明宣さん一家がおられ、ご一緒に暮らしていらっしゃいます。

浪江では、養豚業を長年営んだ後、イチジクやふき、わらび、みょうがなど野菜を直売所や市場に卸していた昭平さんは、住宅の軒先で自慢の野菜作りに精を出していらっしゃいます。また、常福寺(浪江町権現堂)の総代も務められ、故あって震災前の平成18年には、北陸へ上野家の御先祖を訪ねる旅をされた行動的な方で、今年86才を迎えますが、大変お元気です。



▲昭平さんを囲んで、長男の明宣さんと妻、みき子さん。
明宣さんとみき子さんは「浪江の家に帰って、東京オリンピックが観たい」とおっしゃっていました。

■避難中に病に倒れて
震災当日午後2時30分頃、私には家の中にいたけれど、随分長い揺れだったな。屋根のぐしは全部落ちてしまった。孫が4kmも離れている仕事場から、「大丈夫か」と駆け戻ってくれたことは、本当に嬉しかった。忘れられません。

■出来ることなら帰りたいけれど
恵向は便利がいい所だし、仮設住宅とはいってもちよつとマシなように思うな。一時、腰痛が酷くて、近くの谷病院へ1年間通って治りつつある。最近週2回、院長先生

が止まっていたので即席ラーメンを食べた。避難のために津島に向かう人が「家の窓が開いているぞ。誰か逃げ遅れていないか」と言ってくれ、長男が知り合いと一緒に迎えに来てくれたんだ。津島から福島市南向台の次男の家へ行って、私は1か月くらい居たかな。息子たちには1週間世話になったけれど、地元情報が少ないのであづま体育館に移ったんだ。その後、家族が合流して磐梯町の七つ森ペンションに避難し、4月から8月まで居た。浪江の人も5所帯ほどいたな。避難先はやつぱり寒かったのかな、4月半ばに急性肺炎で会津若松市の竹田総合病院に1か月ほど入院し、9月1日にここに越して来た。



▲恵向のご自宅の前で。

の診療日に通院しているよ。車を運転して浪江にも時々帰ってる。まちの復興も復興住宅の建設も遅れているけれど、除染は大分進んでいるようだ。だけど立野は昔、飛行場にする計画があつたほど平らな土地で、広い田畑が広がっている。これを全部するのは大変だろうな。一生が過ぎるのは早いと思う。浪江に帰れるかどうかかわからないけれど、私の父は米寿の祝いをしたから、そのくらいまでは元気でいたいなあ。